

本因坊秀甫（1838～1886）

秀甫はスケールの大きな人物です。固定観念に囚われた囲碁の技法を、秀和、秀策の線に添って新しい地平を開いただけでなく、幕府管轄の特殊法的な家元制を、新政府に於ける社団法人的な「方円社」に変転し発展させて、社会的な位置を認知させ確立しました。その原動力は幾多の逆境を乗り越える間に培われたものでしょう。貧困にあえいだ少年時代、御城碁出仕の望みを絶たれ、本因坊跡目の希望を砕かれて地方を放浪した青年時代に、多くの人々と出会い、新しい時代の囲碁はどうあるべきかを考える時間が少なからずあったにちがいない。

同志とともに立ちあげた方円社の事業には秀甫の思いが凝縮している。棋士の技量向上には機関紙「方円新報」で惜しみなく懇切な評を開陳し、しかもそれを一般同好に配布して普及に役立てました。段を級に変え、一級から九級へと順下がりに表示したのは世界的な表示法にならったものですし、さらに初段相当の九級の下に一級初段から三級初段までの階級を設けて、多数のフアンの手の届く位置にハードルを引き下げました。欧米諸国への普及を視野に、ドイツ人コルベルトへ定石解説図を与えた事もよく知られています。

おそらく秀甫は普及を重大視した最初の人でしょう。のみならず、「棋道保続趣意書」を発表して募金を募り、後進育成に手をそめました。こうした秀甫の先進的な発想は、中江兆民の「一年有半」で近代三十一人の非凡人に数えられる傑出したものでした。そしてその碁もスケールが大きい。大仙知や元丈、丈和、幻庵因碩につながる戦う碁であり、緻密な秀和、秀策の碁とは異なる魅力に満ち溢れています。成果を求めて闘う碁でなく、戦いの内に方向を見出していく碁、安定感には幾分欠けても意外性に富んだ手法は、維新の激変を経験した人々を魅了した。

方円社の隆盛と反対に本因坊家をはじめとする他の家元は衰退の一途をたどっていく。

明治17年、林家を辞し本因坊家に戻った土屋秀栄が十七世をついだのを見て秀甫は動いた。後藤象二郎を介しての、本因坊家との和解である。明治十九年七月秀栄に譲られた形で、秀甫は十八世本因坊に就いた。

秀甫の時代、多くの棋士は生活のため碁界を離れなければならなかった。消えかけた文化遺産を骨太に再構築し、現代に伝えたのは秀甫の功績です。秀甫は断層のある旧時代の碁から新時代の碁へ、懸け橋となつてつないだ。棋士ばかりでなく碁そのものも、旧時代の試行を新法として定着させました。一つ秀甫の弱点は、青年時代に希求した本因坊の名を組織の目的を少し後退させてまで入手したことでしょう。しかしそれも七十五日間しか続かなかつた。天保9年（1838）に生まれ、明治19年（1886）、49年の波乱に満ちた生涯を閉じますが、盤上盤外とも大きな足跡を残した棋士としては、四世本因坊道策と肩を並べても不足ない人物であつた。

完